

「2022年度タイ・チュラーロンコーン大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学理学部3年 野上千華

私はタイのエンタメや食文化が好きで、将来タイで働いてみたい気持ちもあったためその第一歩として今回の派遣に参加した。しかし私は旅行・留学を含め海外に行ったことがなく、海外での暮らしがどこか現実離れしたものであった。そのため留学や海外で働くことの想像がつかず、ハードル高く感じていた。2週間という短い期間であったが、実際にタイで生活をしたことで、海外での生活を具体的で現実のものとして考えられるようになった。例えば、タイと日本のカルチャーショックとしては、交通事情やトイレ、治安の違いが挙げられる。派遣前、こうした違いが将来タイで働くことのブレーキになるのではないかと考えていた。もちろん違うことは違うのだが、その違いは案外受け入れられるもので、新鮮でもあった。懸念点というよりもはや魅力に感じられた。

派遣先ではタイ語の他にタイの歴史や文化、社会や経済の講義を受けた。特に印象に残っているのは僧侶に関する話題だ。僧侶になるのは必ずしも信心深い人だけではなく、貧しさから生活のために仏門に入る人も少なくないらしい。宗教とは精神的な支えのみならず、ある意味「現実的」な社会のセーフティーネットのような役割も担っているのだと気づかされた。また、僧侶というと寺に常時こもり修行に専念する、俗世間には出てこないイメージがあった。しかしタイの僧侶の方々は大学に通って勉強もするし、電車に乗って移動もする。実際私も街中や大学内で僧侶にすれ違うことが頻繁にあった。宗教が社会に溶け込むような現象はおそらく日本にもあって、気が付いていなかったのかもしれないが、よく言われる「タイでは仏教が身近だ」とはこのようなことなのだとして初めて身をもって感じた。以上のように、タイに訪れたことで宗教に対する印象が大きく変わった。

進路への影響として、今やるべきことに迷いなく打ち込めるようになったという点がある。冒頭に述べた通り私はタイで働きたいと思っている。現段階では研究職を目指しているため、今回の派遣先でもあるチュラーロンコーン大学などで研究者として働ければと考えていた。派遣前は、博士課程などで留学をしたほうが良いのだろうか、それとも日本で勉強してから研究者として渡航したほうが良いのだろうかといったように漠然とした迷いがあった。いずれの選択肢も良いようにも悪いようにも見え、いつ決めればいいのか、今は何に集中すればいいのか、チャンスを逃したらどうしよう、など色々と迷っていた。しかし、派遣先でお世話になったチュラ大の先生方や学生の話聞き、学生又は研究者としてタイへ渡航することの良い面や悪い面を具体的に想像できた。そのため漠然な不安に気を逸らさず、専門の勉強・英語力やタイ語力の向上など、まずは自分の力をつけていくことに集中できるようになった。今後もアンテナをはりつつ目の前のすべきことに打ち込みたいと思う。

2週間という短い期間であったが、大変有意義な経験ができた。タイがより好きになり、またすぐにでも訪れたいと感じている。また、他の国や地域に渡航するハードルが下がり、以前よりも海外への興味が湧いた。本派遣をサポートして下さった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。以上で報告を終わる。